

鹿角製のオモゲー

大分市の大友府内町遺跡から出土した用途不明の鹿角製品を見た時、南島でオモゲー、江戸時代には拍子と呼ばれた馬具と確信した。^{くつわ}銜をくわえさせず、馬の両頬を挟み込む木製の馬具は数多く伝世しているが、鹿角製の考古遺物として初めての出土例であった。

オモゲーとは、左右一対の鹿角の加工品でウマの鼻面を挟み、上部の孔で左右を繋いで固定し、中央の2つの小孔から後頭部に紐を廻してずり落ちないように固定し、下部の孔を締めたり弛めたりして御者の意思を伝えてウマを制御する道具。下端の可動部に力がかかり、破損しやすい。銜に比べてウマへの負担が軽く、駄馬用に広く使われたと思われる。

(埋蔵文化財センター 松井 章)



出土した鹿角製のオモゲー（原寸大）



原図：『石山寺縁起絵巻』

オモゲー（左上）と、同じく出土したヘラ状鹿角製品（右下）
オモゲーの表面には装飾や穴をあけるなどの加工が見られる
ヘラ状鹿角製品は、鹿角を平坦に磨いてバチ状に整形したもので、
弦楽器のバチであった可能性がある。